
Line

一条 灯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Line

【Nコード】

N6577S

【作者名】

一条 灯夜

【あらすじ】

卒業が認定され、就職も決まっている、何に追われる事も無い時間。

そんな日々をゆっくりと過ごしていた主人公は、一通の手紙を古い荷物から見つけた。

それは、ずっと昔に付き合っていた女性が、プレゼントに隠して渡したものだっただ。

日々は、ゆっくりと穏やかに流れていた。

冬が終わっていくのを、ほころび始めた桜にも、緑になっていく街路樹にも、風の温かさにも、空の色にも、彼は感じていた。

こんな風に、スローテンポで過ごすのはいつ以来だろうと、彼は考える。でも、思い出せる限り、いつだって何かに追われて過ごしていた。彼が特別だったわけじゃない、誰もが皆、常になにかしらの物事と対峙している。ただ、彼は、人より物事を投げ出すのが苦手であっただけ。

だからこそ彼は、今の時間を、ありのままに過ごそうと考えていた。

内定を勝ち取り、卒業審査もパスした、二月半。

大学院生と社会人の境目、幕間の小休止。

ほんの少しの目標の無い、ニュートラルな時間。

卒業旅行には、いくつかのグループから誘われたが、彼は、その全ての誘いを丁寧に断っていた。深い理由があったわけではない。ただ、もともと彼は騒がしいのを好むタイプではなかったし、この期に落ち着いて一度自分を見直そうと考えていたからだ。大学院を目指し、それを修めたからこそ、一気に突き進んできたこれまでとこれからを分けて考えておく必要があると、彼は思っていた。

近くの本屋をひやかしたり、ほぼ指定席となった大学図書館の定位置でレポートではなく小説を開いたり、行きつけの商店街を回ったり、今まで入ったことの無い定食屋で昼食をとったり、長く住んだ街の曲がったことの無い道を曲がって知らなかった場所へと足を進める。そんな風にして、彼は自分の人生の約四分の一を過ごした街を記憶し、また、思索の糧としていた。

外に出ない日は、部屋の中の整理に費やしていた。彼の就職先は、

社員寮を手配してくれるということなので、この部屋とももうすぐ別れることになる。最初と比べればずいぶんとくたびれたなど、日に焼けた壁紙や色褪せたカーテンを見ながら彼は思った。そうして荷物の整理を始めているのに、六年近く住んだ部屋に、あと一ヶ月程度しか居ないのだということが、実感として湧いてこなかった。きつと、違う場所で過ごす自分を上手くイメージできないせいだと彼は思う。これまでの人生の、実に四分の一の時間をここで過ごしたのだから。最初の頃こそ戸惑ったこの部屋に、一週間もたたないうちに馴染んでいたのだから。

薄く雲が空を覆った土曜日。

外出する天気じゃなかったから、今日は一日中部屋にいようと彼は決めた。

日常で使うものは、まだこれからしばらくはお世話になるため、彼は収納の奥の荷物から整理を始めた。結局封を開けることの無かった大皿や、懐中電灯。高校の学生服に、絵の具のセット、引越す当時には実家に置き去りになってできなかった品々だったはずなのに、今はそれを持ってきたことを不思議に感じる。そんな経時的な変化を、彼は、恥ずかしいような、照れくさいような、それでいて微笑ましく思うような気持ちで、見つめていた。

独りでニヤついているのは危ないな、なんて思いつつも、誰に見られるものでもないのだし、いいかと、彼は心の中で呟く。

一つ一つの品を過去の記憶と照らし合わせながら、それらをもう一度真新しいダンボールに詰め直していく。それは、過去の自分自身との対話の様でもあった。初めての一人暮らしに、吟味して選んだ。当時の彼の趣向を反映した品々。戻ることは無いと決めた故郷に、置き去りには出来なかった童話に漫画。そのときの気持ちがありありと浮かんで、ちっぽけなガラクタさえ、今の彼には輝いて見えた。

いつの間にか、彼はその作業に没頭していた。指先の触れる一つ

のものに、いくつもの思い出があり、それは過ぎ去った物であるが故に甘く切なく心の水面を震わせる。

だけど、突如として彼の表情が凍りついた。

奥のダンボールの隙間に収まっていた、一括りの雑誌の束のようなもの。彼は、最初、高校時代に好きだった化学雑誌を仕舞ったのかな、と思つてそれらを引つ張り出した。その衝撃で、紐が解け、辺りに散らばったのは、小学校から高校までのアルバムや文集、その他色々な本やプリントだった。

正直、そんなものまでこっちに持つてきているとは、今の彼は思つていなかった。

手に取ると、それらの品々はあまりに拙く、全てが古惚けて見えた。

少しページを捲つて、それからすぐに閉じたアルバムに、珍しくセンチメンタルになっているのかな？ と、彼は思う。でも、もしやうがないことなんだろう、とも。彼が故郷を離れ、その場所で築いた人間関係の全部と連絡を絶つてからもう六年が過ぎていたのだから。

全て捨てなくとも、今の自分だったらもつと上手く程よい距離で開けていたんじゃないか、そんな風に彼は思った。それは、確かに微かな後悔を伴つてはいたが、その後悔はそれほど強いものではなかった。当時の彼にとって、人と違つていることはコンプレックスの一つではあつたし、だからこそ彼を取り巻く周囲の反応は、やはり我慢出来ないものであつた。その小さな劣等感とプライドを、彼は今も覚えている。だから たとえ今の自分が、あの頃に戻つたとしても、同じようにしか振舞えないし、結局は同じ人生を歩むことになるだろうと、思つていた。アルバムや、文集や、教科、そんなモノが雑然と重ねられた一束を、もう一度括り直しながら。

彼は、それをどうするか迷つたけど、それでも、近くの空き箱にまとめて放り込んだ。捨てることまでは、するつもりは無かつた。昔の彼がそうであつた様に、いつかは向き合えると思うことにして、

永遠に保留にしておく。そんな腹積もりは、意識しない部分に小さくあつたのかも知れない。深く傷つかないために、そうしたことは重要だ。

やや後ろ髪を引かれる様な感覚のまま、彼は、もう一度収納に向き合おうとした。だけど、さっきまでと比べると気もそぞろで、これからまた埃っぽい収納の中に頭を突っ込むということを考えると体が動かないでいた。

だからなのかもしれない。彼が、床に落ちていた小さな手紙に気づいたのは。最初は、見覚えの無い手紙を不審に思いながらも、それを拾い上げた。裏返すと、可愛らしいシールで封がされたままだった。きちんとした便箋ではなく、中学・高校の女子生徒あたりが使いそうな、ピンク色の小さな可愛らしい便箋。差出人の欄には「from 夏海」と記されている。

はつとして、彼はさっき纏めた物の中から、一冊の本を引っ張り出した。白い装丁の一冊の本。表紙カバーがずれて、裏地が見えている。手紙の出所は、そこだと彼は確信する。

ずっと昔、彼女が彼に送った一冊の本だった。

背表紙に隠されていたメッセージが、今になって出て来たことに、彼は戸惑っていた。

今更、何も変わらないと、彼は思う。それでも、書かれている彼女の気持ちに触れたいとも。

意を決して、彼は八年間という時間、彼女の気持ちを留めてきた封を破った。

彼の両親は昔から不仲で、そのとばっちりを受けて育った彼は、同年代の子が見るようなテレビを観れず、皆が持っている玩具を持つてずにいた。そんな環境だから、他人と同じように考えたり感じることが出来なかった。だからなのだろう。彼は、自分が人と違っていることを十分に分かっていたし、それなら無理に合わせなければ

良いと考えていた。事実彼は、小学校、中学校、高校、全ての場面で誰よりも大人びていて、冷静で、それゆえに、周囲の温度を下げるような、そんな冷たさを感じさせる人間だった。

……ただ、彼女だけは、昔から彼と良く接していた。中学でクラスが分かれても、高校が別々になっても、彼女とだけは何かと縁があった。とは言っても、彼女にとって彼が特別だったかというところ、必ずしもそうとは言えない。豊かな表情と、素直な感情表現、守ってあげたくなくなるような愛くるしい容姿。自然と人に好かれる、そういう女の子だった。

だから、彼が彼女と居ても、そこまで奇異に思われることは無かった。彼でさえも、彼女に惹かれているんだろうなと思われるだけで。

ただ、彼に対する彼女の態度で、他と違う点を上げるなら、いつも張り付いている小さな微笑が消えるということ。もつとも、それすら周囲には、彼女でさえも彼が苦手だと思われるだけ。本当のところは、二人だけが分かっていたいれば、それでよかった。

それは、中学三年の春の終わりのこと。校門を出た彼の横に、小走りで追いかけて来た彼女が並んだ。彼は、ちらりと彼女を見て、それからさっと周囲を見た。帰宅部は人気が無いせいか、同じ学生服は少ない。誰かに聞き耳を立てられる心配は無いな、と彼は結論付ける。もつとも、彼女もそれを知って近付いてきたのだけだ。

「三組のウエムラ君が、バスケ部のレギュラーになったそうです。わざわざ昼休みに私の教室まで来て、報告してくれました」

びしっと敬礼して、ちよつと不貞た様な顔で彼女は彼に告げた。彼女の肩の少し下まで伸びる柔らかそうな髪が、少し揺れた。ほんの少し色の薄い大きな瞳が彼を真っ直ぐに見つめ、小さな唇は皮肉っぽい笑みを浮かべている。彼以外の人の前では、絶対に見せない彼女の表情だった。

聞き終えた彼は、訝しげな顔をして、それから溜息を飲み込んで

問いかけた。

「それを聞かせて、どうしろと？」

「さあ？ ウエムラ君に聞いてみれば」

悪びれもせずに、彼女は言った。

「俺に伝えるとは、言われて無いんだろ」

「もちろん。でも、私も別に聞きたく無かったよ」

普通の顔で、ものすごい毒が出たな、と彼は呆れ過ぎて感心するくらいの気持ちで思った。

「性格悪いって言われない？」

「一人にしか言われない。……皆、都合の良い私に、私を当てはめようと必死だから」

自嘲するように笑った彼女は、ふざけて作ったしかめっ面を彼に向ける。

「そういうものだろ？」

特に感慨を示さずに、彼は答える。

「ええ、そうね。だから、ちょっとひがんだだけ」

彼の正面に回りこんだ彼女は、手を背中で組み、少し上体を屈めて、上目遣いに彼の顔を覗き込んだ。答えを期待している訳じゃない。孤立することを気にも留めずに、卑屈にならず、自分のスタイルを貫く彼が少し羨ましくての行動だった。

彼は何か言おうとして、でも、言いたいことは結局、心の中でまとまらず一瞬目を伏せてから、彼女を見つめ返した。

「気にしないで、無いものねだり。私は、そんなにメンタル面強くないし」

彼女は、踵を返し背中を向けた。髪が風になびき、スカートの端が揺れる。

どうでもいい人に、くだらない理由で付き合うのは嫌だけど、一人きりは怖い。彼女は自分の内にあるその気持ちを十分に理解していた。だからこそ、彼を少しずるいと思っていた。彼女が思う様なことは、彼を悩ませはしないんだろうなと考えていたから。

「そう言われると……、なおさら困る」

本当に困った顔で、呟くように言った彼。

それを満足そうに見て、彼女は満面の笑みを浮かべた。

そんな二人の関係は、なんと呼ぶのだろう。きつと名付けられない。それを現すには、言葉は狭く不自由だ。それに、彼も彼女も、お互いの関係をなんと呼ぶかなんて気にしていなかった。ただ、その距離が他の誰とも違う特別なものであると感じていた。

だからといって、二人の間に一般的な男女に芽生えるであろう感情が無かったかといえ、それは違う。

その頃既に、彼は、彼女に惹かれていることに気付いてしまっていたし、日々強くなるその想いを、必死で隠していた。

恋に落ちた理由は、彼自身が最も知りたかった。劇的な出来事も、特別な切っ掛けも、何もなかった。ただ、側にある彼女の気配を愛しく感じ、ずっとそれが続くことを願っただけ。それが当たり前のことだと、彼は知らなかったのだ。そんな自然な恋を。

だから、自分の内に、こんなにも強い気持ちがあったことに、彼は驚いていた。

想いにはつきりと名前を付けたのは中学二年の冬で、彼女に告白したのは高校二年の夏だった。気持ちを伝えると決めるのに、それだけの時間が掛かった。もっとも、自覚する前の淡い恋心さえ含めるなら、更に長い時間となるが。

夏休みの最初の日に、彼は彼女にメールした。アドレス交換はしていても、彼から連絡するのは珍しい。いつもは大体、彼女からの返信に悩むメールを受け取るばかりだったから。

返事は五分も経たずに携帯を震わせる。そこにはたった一言、いいよ、と、書かれていた。

確か、その年は熱い夏だったと彼は回想する。
でも、その日を振り返っても、熱の記憶は浮かんでは来なかった。
むしろ、利き過ぎた冷房の様な、芯まで冷える感覚がしている。

日差しがアスファルトに陽炎を生み出し、夏の休日はどこも人で
ごった返していた。無責任な誰かの大きな笑い声が聞こえる。車の
音、電車の音、蝉の声が街路樹から降り注ぎ、まるで、誰も彼もが
浮かれているようだった。

覚えていない方の駅前で、彼は彼女を待っていた。
彼女と、約束をして会うのはこれが初めてだった。これまでは、
偶然に会えた時に話すことは会っても、理由を付けて会ったりはし
ていない。きつと彼は、孤独に慣れ過ぎていたのだろう。

ダークブルーのチュニックブラウスに、明るい灰色のキュロット
スカート、薄く化粧をした彼女が時間通りに現れる。

彼女は彼を見つけると、少しはにかんで見せて、それから小走り
に駆け寄った。

「俺、夏海のこと、好きだよ」

躊躇ったら、二度と言えない。彼は自分の性格を的確に分析し、
彼女が何か言う前に真っ先にそれを伝えた。

「うんうん。それで？」

冗談なのか、本気なのか、見分けがつかないにやけ顔で、彼女は
問い返した。冷静な場合なら、彼も、彼女の普段と違う態度に気付
いたのだろうが、告白の緊張と、予想外の切り返しに、彼は完全に
テンパっていた。

別に彼女は、苛めたくてそんな台詞を言ったわけではない。いつ
もはクールで、そういうことにも淡泊そうな彼が、緊張でたどたど
しく想いを伝える姿が、なんだか可愛らしく見えたのだ。そのギャ
ップと、初めて彼の口から告げられた彼の感情に舞い上がっていた。
だから、つい、そんな意地悪がしたくなったのだろう。

「付き合わないか？」

赤く、困った顔で、ようやく彼はその一言を言った。

「……うん、いいよ」

長い沈黙の後、彼女はくしゃりと明るく清々しく笑って、そう答えた。

でも、その瞬間、張り詰めた緊張から解放された彼が感じたのは、嬉しさよりも、むしろ、戸惑いや不安だった。OKされるとは、考えていなかったせいもある。感情というものを、上手く御しきれないんだ、と、彼は思う。いや、そもそも彼は、自分の心に自信が持てなかった。伝えなければ壊れてしまふと感じるほど、強く想っていたはずなのに、今は暗く、漠然とした不安だけがある。想いを伝えて、それが結ばれた後のビジョンを、彼は持っていなかった。ただ、ただ、想いが溢れた。それを制御しきれていなかった。それがこの告白であり、重なってしまった想いに、彼は怯えていた。そして、その懸念は現実のものとなる。

デートはいつも失敗続き。中途半端に間が空いてしまった映画の時間も、食事の場所とタイミングも、彼女のウィンドウショッピングの付き添いも。

そんな自分を、情けないと彼は思った。

彼女は彼を、少し微笑ましく見守っていた。慣れてないのは、予想もしていたし、なんだかそれが可愛らしく見えたのだ。もっと隙の無い、強い人だと勝手に思っていたから、当たり前前の十代の男子である彼に、少し親しみが湧く。でも、その一方で、頑なに自分が自分の事を話そうとしないことに、胸を痛めていた。そんなに信用が無いのかな、と、彼女は思い悩む。

結論として、彼は、あまりにそういうことを知らなかったのだ。誰かと深く関ることを。

だが、それも当然だろう。彼は、ずっと一人でここまで来たのだから。幼い頃は、他人と違っていることから疎外され、一人で強く生きるしかなかった。成長してからは、かわいそう、なんて哀れま

れることも嫌って、余計一人になった。他者と関らずに生きれてしまったから、想いはそこにあるのに、それを伝え共有する手段を彼は持っていないかった。

だから、彼女から別れを切り出された時にも、彼にはさほどの驚きは無かった。

むしろ、やっぱりな、という思いの方が強かった。

「……ごめん、別れよう、と、思う」

付き合い始めて、三ヶ月経ったか経たないかという夜の電話で、彼女は告げた。

「そっか」

短く、彼は答えた。驚きも、失望も無く、ただ淡々、その言葉と意味を受け入れていた。

やっぱりな、そう、彼の心が眩く。

張り詰めていた糸が切れるような、重い荷物を降ろしたような、微かな開放感。それを感じてしまっていることに、彼は微かな嘲笑を浮かべた。

「理由、聞かないの？」

彼女は、不安と微かな疑問を隠さずに、彼に問いかけた。

「聞けないんだ」

聞いたところで、もうどうしようもないし、と、彼は口には出さずに思う。彼女が嫌がっているであろう行動を修正しても、彼女が欲しい言葉を知ることが出来たとしても、それは、もはや遅すぎる。別れを切り出された時点で、もう以前と同じように彼女を愛せないことを、彼は感じていたのだから。心が冷めていくのを、気持ちが消えていくのを、彼ははっきりと感じていた。

「優しいんだ」

そんな彼の心情を知らない彼女は、穏やかに言った。

彼女にとって、別れようと思った理由は、自分でもはっきりと整理できている。分類して収納できるような感情ではなかったし、

その漠然とした不安や、違和感を伝えられるとは思っていなかったから、理由について尋ねない彼の行動を、彼女を困らせたくない優しさだと勘違いしていた。

「そういうんじゃないよ」

彼女が言った『優しんだ』の言葉に、内心苦笑いしながら彼は答えた。

彼は、自分の中にやさしさがあるなんて、これっぽっちも思っていなかった。優しさがあるなら、今、自分が抱く感情は、きつともっと違ったものはずだと彼は思う。

「……和海は、もつと自信、持っていていいと思うよ」

少しの沈黙が流れ、迷う気配があつてからそう彼女は言った。別れると決めたのは彼女自身だったが、惹かれていた。例えば、彼の心の強さや生き方、不思議な魅力、そういったものが薄れたわけではなかった。ただ、歯車に砂が噛んだ様な、しっくりこない気持ちがあつた。その感情に、彼女は唇を皮肉っぽく歪めた。彼は、掌に収めるには、きつと自由過ぎる。私に対しても、全てを見せていない、と、彼女は思う。

そんなことを知る由も無い彼は、じゃあ、なんで別れようと思うんだよ、と、心の中で呟く。だけど、それは言うべきではない台詞だつて事を、彼は理解していたし、そんな風に考えてしまう自分を少し情けないとも感じていた。想いというものが規格化した数字じゃない以上、好き合う理由も、別れる理由も、人それぞれなんだし。「ありがとう、それじゃ、もう切るよ。さすがに、別れ話を切り出されて、これ以上話しているのも、虚しい」

彼の声は、かすれも震えもしなかった。

「ごめんね……」

「ああ、じゃあな」

そうして彼は、また、一人に戻っていった。ただ、それを苦とは感じてはいなかった。

それは、八年が過ぎた今も。

彼は、あれから一度も恋をしなかった。

時々には彼に想いを伝える女性もいたけど、彼女でさえ駄目だったのだから、もう全て徒労に終わるだろうと、彼は考えていた。

便箋の中からは、二枚の手紙が出てきた。

彼女の癖のある丸文字が、昔と変わらずにそこにあった。

『この手紙を、いつか見つける和海へ』

すぐに見つかって、明日あたり照れた顔でお礼を言うのかな、とか思ってもみたけど……和海は変に鈍いところも、変に鋭いところもあるから、やっぱりいつ気付くのかなんて全然分らないや。うん。手紙にしたのは、そういうのも込みでなのかもしれない。

和海は気付いてなかったかもしれないけど、私もずっと和海のと好きだったんだよ。

どこか飄々とした生き方が凄く羨ましくて、そこに惹かれていたのかと思っただけど、違っただけ。付き合っただけ、それが少し分かった。

……和海が、私に話そうとしない、バリア張ってるラインがあるのには、泣きそうになるけど。それも、いつかは超えられるよね？ 私は、いつまでだっただけ一緒にいたいんだから。

これからも、ずっと。

だから、ぜったいぜったい手を離さないでね。

菜穂より』

読み終えて、彼は顔を歪めて笑った。

「そんなこと言って、自分から手を離してりや、世話無いだろ」

その時は、気付けなかった、押し殺した思いの数々。それらが、歳月を超えて届いた一通の手紙に触発され、鮮やかに心の水面に浮

かび上がる。

眩い想いの数々に、微かな眩暈を覚える。

上手く付き合いたいと、一つの欠点もなく、完璧な関係でありたいという青いプライドが当時の彼にあった。理想についていけない自分への失望があった。誰からも好かれる彼女への劣等感があった。

携帯をポケットから引っ張り出すのに、短くない葛藤があった。

「どん引かれるだろうなあ」

彼は小さく呟く。

でも、それを止めようと思う心は、彼の中には無かった。

物笑いの種にしかならなくても、今の衝動を抑えられないと知っていたからだ。

ああ、でも、そういえばそうだったなと、彼は思う。昔から、物分りが良いふりはしていても、一度決めたら梃子でも動かない。基本的に、本質の面において、彼は変わっていないかった。

落ち着き大人ぶった常識人の彼は、そういう自分を演じていたことに、今、気付いていた。

自分は何を伝えたいんだろうと、彼は自問する。よりを戻したい、なんて今更過ぎるし、なんだか違う気がする。そもそも、お互いにもう二十四だ。案外、結婚して子供がいるかもしれない。そう考えると、複雑な気分だけど、悪い気はしなかった。

ま、いいか、と彼は思う。取り合えず急な電話を謝って、それとなく昔伝えられなかったことを迷惑にならない範囲で言っ、……今も大切に思っていることは、告げよう。嫌われてたとしても、間に合わなくても、それはそれで良い。前に進むにも、きっかけは必要だ。

たとえ、どんな結末になろうとも後悔しないことを彼は誓った。

別れても消すことの出来なかった彼女のプロフィールを呼び出し、彼は一瞬メールにしようかとも悩んだが、電話番号を選択し、発信した。

呼び出し音が鳴って、そういえば、良く掛かったな今更、と彼は思う。最後に電話した日はもう六年も前で、そもそも彼女が携帯を持ったのは中学一年の時だったから、十二年もこの番号が使われていたことになる。そう考えると、なんだか感慨深いなど、彼は感じた。

電話に彼女が出ないまま、六コール目が鳴る。

「もしもし？」

駄目かなと思った時、懐かしい声が聞こえた。少し眠そうな、菜穂の声。きつとディスプレイなんて見ずに出たんだろう。何の気構えも無い声が、少し嬉しい。

変わってないなど、嬉しさを隠さずに顔を綻ばせる。

彼は、八年ぶりに彼女に想いを言葉に乗せて届けるため、大きく息を吸い込んだ。

(後書き)

後書きまでお読みいただき、ありがとうございます。
いかがでしたでしょうか？

少しいつもと違うスタイルに挑戦しようと思いましたが、
実は想像以上に時間がかかりました。以前と比べ、小説を書くとい
うことには慣れつつありますが、柔軟さには欠け始めたのかなと、
自己分析もしてみたり。

さて、普段書いているものの多くは一人称ですが、今回は三人称で
す。

ですけど、反省するなら完全な三人称と言えないかもしれませんね。
作品の雰囲気も、いつもとちょっと変わった毛並みに仕上がったの
ではないのかな、と自分では考えております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6577s/>

Line

2011年4月22日20時40分発行